

平成 30 年度

事業報告書

(事業年度：平成30年4月1日から平成31年3月31日)

1. アルペンスキーチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿開催数：7回

海外合宿開催数：0回

海外遠征：1回（ヨーロッパデフ Cup 参戦）

■体制整備事業

会議開催数：11回（JPC 加盟団体会議2回、栄養学、アンチ・ドーピング講演会、メンタル講習会、JPC 女性サポートセミナー、デフリンピック会場下見）

■選手発掘事業 デフわんぱく教室へ派遣

(2) 事業の成果

- ① ジュニアを対象にした夏合宿を実施する予定であったが、ジュニア選手の部活動日と調整がつかず、ジュニア選手の中に退会や休会する選手がおり、実施できなかった。
- ② 栄養学研修会を開催し、アスリートとして必要な栄養の摂り方を学び、大変有意義であった。
- ③ ヨーロッパデフカップ大会（イタリア）で下記の通りメダル取得・入賞した。
メダル：中村晃大選手～SC 銀・SG 銅・GS 銅・SL 金
入賞：北城大地選手～GS4位・SL6位
吉田絢音選手～GS7位

(3) 事業に対する評価

- ① K 選手が手首の複雑骨折にて手術を受けた後、トレーナーの助言にてトレーニングするも正しいプロテクター装着ができておらず、骨折した患部を構えてしまい、力を発揮できないというメンタルの弱さが出ていた。
- ② N 選手は職場の異動により大会や体力測定に参加できない状態であった。しかし日頃の自主的なトレーニングの成果で他の男子選手の中でもトップでアスリートとしての意識も高い。
- ③ 中学女子選手の身体的能力が著しく、オフシーズンの合宿で女子成年選手はその中学女子選手に無関心で負けても闘争心が見られなかった。
- ④ Y 選手は H30 年 4 月より就職し、慣れない環境から来る生活リズムの変化、精神的不安定によりトレーニングすることができなく体力測定の結果も思わしくなかった。しかしオンシーズンでは年々と技術が向上しているため、2019 年度のオンシーズンのトレーニング方法を助言すればさらに体力的も向上し、メン

タル面も強化できると思われる。

- ⑤ 外部コーチの勤務先の事情によりヨーロッパ大会に帯同できなかった。合宿の日時の調整も厳しく帯同できないことがあるため、外部コーチを1～2名増やし、コーチが不在にならないようにしていく。
- ⑥ 女性アスリート研修会において、チーム内へ展開したところ、女子選手から相談があったのは良かった。
- ⑦ 今後の課題として、全員またジュニアから指導と教育が必要である。

(4) 課題と今後の取り組み

【課題1】

事業報告について強化スタッフ間でスムーズなやり取りができない。

【取組方法1】

取組として事業ごとに強化会議を行い、「計画」「実行」「評価」「改善」といったPDCAサイクルの元、業務の効率化を目指す。

【課題2】

団体独立事務所を設置できていない

【取組方法2】

取組としてH30年度より団体独立事務所の立地を検討しはじめた。またH30年度から選手登録費等の徴収を行い、団体事務所購入費の資金作りを開始した。

【課題3】

選手発掘事業で有望な選手を発掘することができていない

【取組方法3】

取組として関東でのスキー教室だけでなく、協会事務所のある北海道でも地元の連盟の協力の元スキー教室を開催していく。

2. アルペンスノーボードチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿開催数：11回

海外合宿開催数：3回

■体制整備事業

会議開催数：20回（JPC加盟団体会議2回、栄養学、アンチ・ドーピング講演会、メンタル講習会、JPC女性サポートセミナー、デフリンピック会場下見）

■選手発掘事業 デフわんぱく教室へ派遣

(2) 事業の成果

平成 30 年度はデフリンピック選考年度でもあり、2019 年 2 月開催の FIS 全日本スキー選手権スノーボード競技会、JSBA 全日本スノーボード選手権大会に照準を合わせて体力 UP・体幹強化・滑走（実践）強化を考慮した強化事業を計画、計画通り実施することができた。

FIS 全日本スキー選手権スノーボード競技会は、期待の岡村選手が惜しくも予選 9 位となり決勝進出を逃がしたものの、予選タイムは KPI 目標をクリアすることができた。また、同選手は JSBA 全日本スノーボード選手権大会地区予選においてトップクラスで予選を突破、本選でも総合 2 位入賞するなど素晴らしい成績を残し、本年度の KPI 目標は全て達成することができた。

(3) 事業に対する評価

コーチ不在だった昨年度の反省から、年度初めに渡部コーチ（SAJ スノーボードデモンストレーター）と野藤プロ（2010 バンクーバー冬季オリンピック選手）をコーチとして迎え入れた。今年度はコーチ自身の持つ強化方針（プラン）に合わせて、海外遠征を中心とした強化計画を立てることで、計画通りに選手強化事業を進めることができた。これもコーチ経験豊富な渡部コーチや野藤コーチはもちろん選手をサポートする強化トレーナー、強化スタッフのおかげである。

今年度はデフリンピック選考の年でもあり、デフリンピック選考大会である FIS 全日本スキー選手権大会スノーボード競技並びに JSBA 全日本スノーボード選手権大会にピーキングを合わせ、オフシーズン中に海外強化合宿を 3 回実施した。その成果もあって当協会のホープである O 選手が選考大会で素晴らしい成績を残せたことは、事業成果として評価したい。

一方、反省すべき点も 2 点あり、次年度以降の課題となった。

1. スポーツ科学に対する取り組みが弱い

一流アスリートを目指すには、実践トレーニングによる競技力向上はもちろん、スポーツ科学（フィジカル、栄養学、メンタル）も積極的に取り入れなければいけない。残念ながら、今年度の秋期体力測定テストで各選手とも目標とする数値を出すことができなかった。これは合宿以外の場で自ら積極的にフィジカルトレーニングに取り組むことやアスリートに必要な栄養バランスに留意しようという努力が見られなかったことを意味する。

2. アスリートとしてのストイックさが見られない

これまでデフ選手はデフ選手のみという狭い環境でトレーニングをやってきたせいもあると思うが、自身に対しては甘くちょっとしたことでも妥協を許す等、ストイ

ックさが今一つ感じられない。今後は聴者アスリート選手と合同トレーニングすることによって常に高い目標意識を持ってもらい、トレーニング集中力だけでなく精神的に強くなってもらいたい。

次に、個々の選手の年間トレーニング成果について評価してみた。

まず、O選手。昨年度から著しく成長しており、強化指定選手の中でもダントツで成績が良い。ただ滑り込みが少ないせいかわ雪質によって自分に負けてしまうことが課題である。どんな雪質でも対応できる幅広い滑走技術を身に付けメンタル面を強化すれば、常に全日本クラスの大会で入賞を狙える選手である。

H選手。既に膝ACL損傷から3年経過しているが、強化合宿中の滑走を見てみると怪我からの回復度が遅いと感じている。フィジカルトレーニングや栄養学を通して本人に膝周りの筋力強化や減量など指導したが、本人の意識改革が見られずトレーニング成果が思ったより得られていない。選考大会に於いても期待する結果を残せなかったのは残念であった。更に競技力を高めるためには、スポーツ科学の必要性を充分自覚しながら意識改革して頂き、積極的にスポーツ科学を取り入れる必要がある。

T選手。強化合宿中に積極的にトレーニングする努力姿勢があることは評価できるが、かねてからの課題であるメンタル面の弱さを克服できていないのは残念であった。昨年度の評価の同様、合宿中に見せたパワフルな滑りを選考大会で発揮すれば間違いなく上位クラスに入れると思われるが、今シーズンの選考大会では残念なことに転倒などの失敗が目立った。

(4) 課題と今後の取り組み

【課題1】

チームの若返りとタレント育成選手の発掘、育成

【取組方法1】

H31年度チーム最重要テーマとして捉え、デフリンピックが終了後にジュニア選手発掘事業を月1回のペースで実施する。

【課題2】

チームとしての危機管理体制を構築し、実行に移す

【取組方法2】

協会と共に危機管理体制構築の検討と危機管理マニュアル整備の検討を行う

【課題3】

団体独立事務所を設置できていない

【取組方法3】

H30 年度に引き続き、団体独立事務所立地条件の検討を進めるとともに、資金源確保の一環として年会費の他に選手登録費、スタッフ登録料を徴収する。

3. スノーボードフリースタイル

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿開催回数：19回

海外合宿開催回数：1回

■体制整備事業

会議開催数：5回（JPC加盟団体会議1回、栄養学、アンチ・ドーピング講演会、メンタル講習会、デフリンピック会場下見）

■選手発掘事業　なし

(2) 事業の成果

平成30年度は年間を通して以下のような成果を上げることができた。

1. 人工芝の斜面を滑り降りジャンプしてエアーマットに着地できるコースがある安全性の高い施設で合宿を行い、ゲレンデでは難しいオーリーの反復練習とゲレンデでは安全性の面からなかなかトライできない縦回転の技に集中して取り組むことができた。結果として一部の男子選手が雪上で実践できるようになり、女子選手はジャンプの練習頻度が上がってきた。
2. 国内のゲレンデで数多くの合宿を実施し、またスロープスタイル、ボードークロスそれぞれの競技のJSBA大会に参加した。その結果、ボードークロスでは男子選手で2回戦まで勝ち上がり、女子選手はJSBA大会一般クラスで6位という成績を収めることができた。結果的に2つの競技の大会を経験することでスノーボードの総合的な滑走技術を上げることができた。また大会に参戦したことで、大会に向けてメンタル及びフィジカル面を自分自身で調整していく経験を積むことができた。
3. スノーボード専門学校のトレーナーによる、体力測定及びトレーニングを年2回実施し、体力向上や身体全体をうまく連動させる為のトレーニングを積むことができた。
4. 5月初旬に積雪量の多い海外の高山で滑り込みを行い、日本と違う雪質や様々な斜面に対応できる滑走技術及びデフリンピックを見据えた海外のゲレンデというロケーションに適応する経験を身につけることができた。

(3) 事業に対する評価

強化指定選手の技術レベルに個人差はあるが、デフリンピックで好成績を収められる為に強化指定選手全員がもっとメンタル面でも成長できるよう練習の難易度を高める必要があったので、コーチに安全な練習場所や安全に上達する為の準備をしていただきつつ、難易度の高い練習を数多く実施した。

また、強化合宿の中で数多くの大会に参戦、スロープスタイルとボードークロスそれぞれの大会に参加することで、強化指定選手の大会に対するメンタルやフィジカル面で必要な経験を積むことができた。

その結果、強化指定選手それぞれの技術レベルを向上させることができたので、チームとしてはデフリンピックに向けて順調に成果が出ている。

ただ、気候の変化でコースのコンディションに変化があった大会では強化指定選手全員が納得のいくような滑走ができなかったので、引き続きハードルを上げた練習を積み重ねなければならないと感じた。

次年度は今年度の反省点を基に12月に行われる冬季デフリンピックに向けて、強化指定選手の技術レベルの底上げができるように強化合宿の練習内容を密に計画し、コーチとの連携を高めながら実施していく。

またスノーボードの技術レベル向上に繋がるよう様々なトレーニングの指導を実施していく。

(4) 課題と今後の取り組み

【課題1】

団体独立事務所を設置できていない

【取組方法1】

H30年度より選手登録費、公認料を徴収しているため、団体独立事務所を設置できるよう準備中である。

【課題2】

タレント発掘事業を実施できなかった

【取組方法】

2019年度は実施できるよう企画を考える。

4. カーリングチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿開催回数：21回

海外遠征実施回数：1回

■体制整備事業

会議開催数：8回（JPC加盟団体会議1回、栄養学、アンチ・ドーピング講演会、メンタル講習会）

■選手発掘事業　なし

（2）事業の成果

国内合宿および国内大会合わせて21回、海外遠征1回を実施し、計画通りに事業を実施することができた。

その成果として、デフリンピックの中間目標としての東北大会出場ができた。しかしながら、技術力を向上させるための目標、すなわち、①チームワークの向上、②アイスリーディングが全員適確にできる、③ショット率を70%まであげ作戦に沿った展開が出来る、④チームサインの徹底と適確なスweep⑤ドロースhot・テイクアウトショットの完成度を向上する、ことについては、①⑤しか達成できていない。

（3）事業に対する評価

【良かった点】

1. 年度の中間目標である東北大会への出場を果たせたことから、選手強化活動事業の成果を十分出せたと思われる。
2. 海外大会（ポーランド）に参加したことは、海外大会未経験の強化選手がデフリンピックの雰囲気のにまれないようにするためにも良かったと思われる。
3. 健聴者の県大会で勝ち抜き、東北大会出場を果たしたのはデフリンピックへ向けて大きな前進と、選手らの自信に繋がったなっと思われる。
4. 体制整備事業については昨年度より事業が減っているが、テレビ電話などを通して強化スタッフ・コーとコミュニケーションを強化できたことは効率面でよかったと思われる。

【反省すべき点】

1. 一昨年度の途中で強化事務を務めていた強化スタッフが家庭の都合で辞任したため、強化スタッフ一人に強化事務が集中してしまった。結果として、強化事務の作業が追い付かなくなり、JSCの実態調査で不適切な会計を指摘された。
2. スタッフ不足により強化指定選手が強化スタッフを兼務する状態が長く続いており、強化活動に支障をきたしている。特に今年度はデフリンピック年度で

もあり、競技に専念するために、スタッフ兼任選手の事務仕事を減らしたいと考える。

(4) 課題と今後の取り組み

【課題 1】

団体独立事務所を設置できていない。

【取り組み方法 1】

団体独立事務所を設置できるよう、選手登録費や公認料の新設など資金造成の検討を行う。

【課題 2】

部員不足のため、選手がスタッフを兼任しており、兼任者は煩雑な事務業務により選手強化がおろそかになりがちである。

【取り組み方法 2】

選手の増員とともに、スタッフの増員を目指し、勧誘に努める。

【課題 3】

モチベーションがあがってこないメンバーに対する強化事業の見直し。

【取り組み方法 3】

オフシーズンは思うような成果がなかなか上がらず、技術の磨きこみも進まず、結果として全く何も形にならない状態であったが、スタッフだけでなく選手にも強化体制計画を意識してもらい、オンシーズンには東北大会に行くことまでモチベーションを上げることができた。今後も全員に強化体制計画の立案からの巻き込みについて工夫できないだろうか？